

1-8. 子ども自身の難聴理解～『難聴理解かるた』を

使う

☆難聴児は知らないことがたくさんある～障害認識の難しさ

難聴児が自分で、周りの人に「きこえない・きこえにくい」ことを説明するのは大変難しいことです。生まれつきの難聴の子にとっては、自分の「きこえの状態」が自分にとっては100%なわけですから、きこえる人たちがどんなにたくさんの音や声をきき、話しているかなかなか自分で想像することができません。ある中等度難聴児の例ですが、その子は、聾学校の帰りにタクシーで母と家に帰ることがありました。しかし、その子にはいつも不思議に思うことがありました。それは、「なぜ、タクシーの運転手さんはどの人も僕の家をちゃんと知っていて、家の前まで連れて行ってくれるのか？」という疑問です。その子はママが運転手さんに“声だけで”行き先を告げていることを知らなかったのです。その疑問は中学生になるまで解けなかったそうです。「難聴児は常識に欠ける」などと言われますが、常識という知識は、きこえる子は「耳学問」で誰からも教えられることなく自然に身につけていきますが、難聴児はそれができません。

難聴児には、今、この場で自分にはどんな音や声の情報が届いているのか気づいていないことがたくさんあります。気づけなければ、それはないに等しいわけですから、周りに何を求めてよいかも当然わかりません。しかし、「〇〇ちゃんわかった？」と言われるとつい「わかった」と言ってしまうことも多いのです。周りに何を求めるべきかがわかるのは、自分には今、ここでの情報が100%得られていないということがわかる、つまり「わからないことがわかる」ことが必要です。タクシーの子の例のように、80%の（音声）情報しかないのに100%であると思っている限り、残り20%の情報はわかりません。音声だけに頼っている限りこの現実から逃れることはできません。情報が「100%わかる」ためには手話・指文字・文字という視覚的手段が不可欠で、もし、タクシーでお母さんが運転手さんに手話と口話を併用して伝えていれば、子どもは横から手話を見て、お母さんが僕の家を場所を伝えたということがわかったでしょう。知識、常識、暗黙

の了解、空気を読む…こうしたことは100%情報が保障されて身に付くことなのです。

☆「難聴理解かるた」を使って

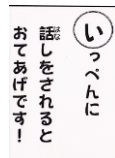
このように、難聴児自身の難聴理解（障害・自己認識）を図るために大事なことは「100%わかる」という経験を積むことですが、さらに、外界の音の多様さを知ること、自分に聞こえる音・聞こえない音があることを知ることも大事です。それは周囲の聞こえる人が気づかせていくしかありません。「ピーポーピーポー」という救急車、「ウウウウ…」というパトカー、「ウーウー」という火事場に向かう消防車、「カーンカーン」という夜回りの消防車…。緊急車両の音だって皆違います。人の声もどんな時は聞こえるか、どんな時に聞こえないか、いろんな場の状況での聞こえについて知る必要があります。こうした経験を積み重ね、そしてその経験を整理することも必要です。

『難聴理解かるた』（右図）は、自分の難聴について知り、周りの人にどんな対応をしてほしいかを伝えるための有効な道具（教材）です。

このかるたは、難聴児たちが日々直面する聞こえにくさや困り感をかたるたにしたものですが、読み札の裏にはその場面でのポイントとなる解説もつけられています。かるたは、文字を覚え、自分の難聴に気づき始める年中・年長頃から使え、親子・きょうだいで遊びながら周りも本人も障害に気づいていくことができます。また、難聴児が在籍学級で自分の困り感を伝えるための道具（教材）として、担任の先生の協力を得て取り組むことで効果をあげているケースもあります。



絵札（表）



読み札（表）

☆「指文字かるた」で文字学習・聴覚学習も

絵札の裏面は指文字かるたで、こちらは年少から遊べます。

また、絵の物の名は、1音節（例「て（手）」）から5音節

（例「このぼり」）までのことばが入っていて、聴覚だけで単語をききとるあそびや音節数のききとりのチェックをしたりすることもできます。



絵札（裏）

子どもの頃の思い出① (小学生の頃 30dB, 現在 40dB)

幼いころから通院していましたが、医者からは補聴器を勧められることもなく「大丈夫、頑張れ」と言われるのみでした。両親は私の耳のために少しでもよいことをと悩み考え、夏休みに東京の有名な針灸治療に1週間ほど通わせたりしました。

幼いころから「きこえなかったら何度でもききなさい！」とよく言われたのですが、二度三度ときき返すと、「あとでね」「子どもには関係のない話」という返事ばかり。だんだんに「きこえないのは仕方ないこと。きき返すだけ寂しい思いをする。しつこくきくと嫌われるだけなんだ。」という思いが胸に刻みつけられたのです。大人になってもひたすらきこえにくいことを隠し通し、「きこえる人間」として生きる私の人生の鑄型が形成されていったと思います。

小学生のときには「きこえない！」という意識はあまりなかったのですが、中学生になってからつらい記憶が始まります。

「きこえないことは恥ずかしいこと。絶対にそのことを悟られてはならない！」なぜかそう思い詰めるようになり、他人を拒絶する思いが加速していききました。声がきき取りにくい教師の授業では、指名されそうな雰囲気を感じると寝たフリをし「きこえないのではない。きいていなかったのだ！」と無言の主張をしたりしました。英単語の発音を10回以上繰り返してもうまく言えず、笑い者になり、音楽の授業中は口パクでやり過ごす。友人たちと話しをしていてもなぜか言い争いが多く、皆はどうしてそんなに仲よくつき合えるのかと不思議でなりません。クラス全員が誰かの冗談に大笑いしても、何がそんなにおかしいのか？とヘソをまげるばかりで、当時の親友の「耳がよかったら、皆がお前のところに集まってくるのになあ」ということばに、悔しくて唇を噛むばかりでした。きこえにくさが人間関係にどのように作用しているのかわからず、ましてそのことにふれたくもなく、私は授業を放棄して、日中はほとんど寝たフリをして過ごすようになっていきました。

(村田哲彦『きこえにくいお子さんのために』全国早期支援研究協議会より)

2-1. きこえてないことこんなにある～40dB難聴のB

さん

臨床心理士のBさんは、幼児期までは難聴であることを知らずに過ごし、小学生になって初めて40dB難聴と診断され、補聴器を装着し始めました。高校生位から少しずつ聴力が低下し、今は60dBの中等度難聴者で、Bさんの話は本人でなくては語れない具体的なエピソードにあふれていました。いくつか紹介してみたいと思います。



☆難聴者はいつもリスニングテスト状態

きこうと思わないときこえない。いつも英語のリスニングテストの状態にあるのが難聴者。聴者であれば、食べながら～、台所をしながら～、書きながら～というように、何かをしながら楽に「きく」ことができるけれども、難聴者はそうはいかない。

いかに難聴者が「きく」ために精一杯相手の声や口形に意識を集中し、話をきいているかがわかります。

☆先手を打って対処する

小学校の時に先生から質問が出ると、一番に発表するようにしていた。もし、後から発言すると、先に発言した友達の話がきこえないため、同じことを繰り返して言ってしまい、笑われるかもしれないので、一番に発言しておけば、同じことを言う失敗はないと思ったから。また、音読の時には、必死で句点（○）の数を数えていました。自分が何番目だから、句点（○）の数を数えれば、何番目の文を読むことになるかが予想できるから。

授業の中で「きこえない」ことで困らないよう、友達に笑われないよう、自分なりに考え、先手を打っていたBさんの姿は、通常の学級でうまく乗り切る処世術だったのでしょう。しかし、その心の内はいつも落ち着かず、ハラハラドキドキの連続だったようです。

4-6. 就学までに身につけたいことばと知識

☆算数でつまづかないために～「機能語」の習得

「計算はできるのに、文章題がさっぱり」という難聴児は結構います。その原因の一つに「機能語」を知らないことがあげられます。機能語とは前後の関係を繋いで文全体の意味を明確にすることばで、助詞、助動詞、接続詞、指示代名詞、などです。まず、以下の問題をみてください。

- ①3に2をたすと□ ②4と3で□ ③2より1小さい数は□
 ④2と1をあわせると□ ⑤4と3では□が大きい ⑥9から3のぞくと□
 ⑦4は1より□多い ⑧8から3とると□のこる ⑨7は□より1すくない ⑩6から2ひくと□ ⑪5から8ふえると□

ここにある問題は足し算・引き算ですから1・2年生なら解ける問題です。しかし難聴児たちはつまづきます。式で $3+2=\square$ ならできて、文で表現するとわからなくなるのです。機能語は、普段の生活の中で意識的に使うよう心がけることが必要です。以下に算数のつまづきの原因となりやすいことばをいくつかあげてみました（内容語を含む）。

	名詞	動詞	副詞	助詞・助動詞
時間	～時～あと ～まえ	着く、立つ、かかる、過ぎる	なかなか、もう、ちょうど	が、は、で、 に、と、の
数量	～うち ～おき ～ぶん ～とおり	はかる、増える、取る 払う、減る、かかる 集める、配る、まとめる 寄せる、分ける、残る	それぞれ いくら どれだけ	から、より、 だけ、まで、 ずつ、には くらい、のに、 ～よう、～たいetc.
位置 場所	～ところ、ど ちら、そこ	囲む、載せる、並べる		
行動 状態	～こと	指す、押さえる、切り取る、 そろえる、積む、表す	色々、はじめ に、もし	

☆小学校では教えない知識・ことば・概念

通常の小学校では、授業の中でいちいち教えてくれない知識やことば、

概念というものがあります。それらはあそびや生活の中で自然に身につけていくことという暗黙の前提があるからです。しかし難聴児は知らないことも多いので、『ことば絵じてん』などを利用して学ぶことも必要です。

就学までに身につけておきたい知識・ことば・概念

項目	指導内容・教材	指導することば
言語変換	手話・日本語の変換	単語や文レベルでの手話・日本語の変換
あいさつ表現（定型表現）	日常挨拶表現 挨拶は人間関係の「潤滑油」としてとても大切。	おはよう、こんにちは、こんばんは、おやすみ、ただいま、お帰りのさい、さようなら、ごめんなさい、すみません、ありがとう、お願いします
50音表（音韻）	50音の配列（縦・横）	濁音、半濁音、拗音等を含む100音の読み
音韻の抽出	ことばあそび	①あをつくことば②しりとり③逆さことばetc.
構成音数	ことばあそび	拍数遊び、じゃんけんグリコetc.
上位・下位概念（概念形成）	仲間あつめ、スレイトゲームなど	乗物・果物・野菜・植物・動物・魚・文房具・色・物・飲物・電気製品・掃除道具・台所用品etc.
身体名称	身体部位の名称	頭、顔名称、首、体、足、手、五指名称etc.
位置表現（空間用語・時数詞）	空間用語、「左から～番目」などの時数詞	上・中・下・前・後ろ・横・左・右・となり・真ん中・始め・終わり・～番目etc.
数の単位	数え方（単位表現）	匹・枚・羽・人・台・日・年・機・隻・着など
時間・カレンダー	年・月・週・日・曜日・時・分など	朝・昼・夕方・夜・夜中、おととい、昨日、今日、明日、明後日、四季名称、月・日・曜日etc.
疑問詞	やりとり・日記	いつ、どこ、だれ、なに、なぜ（どうして）etc.
反対概念・類似概念	ことばあそび（形容詞・動詞・名詞の反対語・対立語・類似語）	大きいー小さい、高いー低い、長いー短い、重いー軽い、多いー少ない、きれいーきたない、捨てるー拾う、行くー来る、前ー後ろ、左ー右etc.
感情・感覚表現	気持ちを表す語、感覚（5感）を表す語	楽しい、悲しい、心配、残念、悔しい、ひやひや、ドキドキ、寒い、ざらざら、くさい、辛いetc.
人間関係	人間関係のことば	父母、祖父母、兄弟姉妹、いとこ、おじ・おば